

## 中勘助の戦争詩

—「鳥の物語」との関連より—

On Naka Kansuke's War Poetry

木内英実

Hidemi Kiuchi

### 要旨：

中勘助は日中戦争開戦を契機に創作した『大戦の詩』（昭和一三年二月、岩波書店）及び『百城を落す』（昭和一四年九月、岩波書店）ら二冊の戦争詩集を文学業績に含む詩人である。それらの詩は家族のために新聞掲載戦況報道記事の中勘助が読み上げるという日常的な営みから生まれた。戦時下でも読者を惹きつけてやまなかった「銀の匙」の作家として、公声曲としてレコード化された戦争詩「光華門」の作詩者として、中勘助は公的に二側面を戦時下に持ち続けた。しかし終戦直前脱稿の「鶴の話」（『鳥の物語』）に集約された目の前の優れた素材の「ありのままを言葉につづ」ることへの中勘助による志向性の前に、戦争詩は詩集再販時には削除されるべき作品となっていた。

### 一．はじめに

#### (一) 中勘助の戦争詩

中勘助（明治一八年～昭和四〇年）による詩歌業の中にはいわゆる「戦争詩」と呼ばれる詩歌がある。昭和一二年九月から昭和一四年までに創作された戦争詩の大部分は『大戦の詩』（昭和一三年一月、岩波書店）及び『百城を落す』（昭和一四年九月、岩波書店）という二冊の戦争詩歌集に収録された。

日中戦争初期の昭和一二年から昭和一三年までに創作された『大戦の詩』収録詩四二篇、短歌七首の初出を見ると、「山西」「聖戦」

の二詩は『思想』第一九五号（昭和一三年八月号）に掲載された。

『百城を落す』収録詩三四篇の内、三詩「蘭州」（『新日本』昭和一四年五月号）、「りす」（『新風土』昭和一四年六月号）、「南京」（『新日本』昭和一四年七月号）は初出誌が存在する。『大戦の詩』『百城を落す』は、その収録詩歌のほとんどが書き下ろしである。

詩集『飛鳥』（昭和一七年三月、筑摩書店）には、『大戦の詩』から「渡洋爆撃」「山西」「光華門」の三篇、『百城を落す』から「南京」「りす」の二篇が再録された。昭和二六年一月に『飛鳥』は創元社より再販された。その折、『大戦の詩』からの三篇削除、『百城を落す』から「南京」削除、「りす」の一篇のみが再録された。

筑摩書房から刊行された現代日本文学全集75『中勘助 内田百閒

集』(昭和三二年六月)収録「飛鳥」の「詩集目次」では「渡洋爆撃」  
「山西」「光華門」「南京」に\*印が附され、「編注——飛鳥」のうち  
\*印を附したものは著者の意向によってこれを省いた」と記され、  
ここでも「りす」のみが再録された。

三好達治は「中さんの詩『飛鳥』のあとに」(『飛鳥』昭和二六年  
一月、創元社)において「中さんの詩は静かで穏やかである。そ  
のあるものは簡潔でぎりぎりに切迫してゐるのであるが、それさへ  
半面静かに穏やかに落ちついて書かれてゐる」と評価した。『日本  
現代詩辞典』(分銅惇作・田所周・三浦仁編、昭和六二年二月、桜  
楓社)において市毛勝雄が「三〇代半ばから詩を書き、詩集『琅玕』  
(昭一〇)『機の音』(昭一一)『海にうかばん』(昭一二)を五〇代に、  
さらに六〇を過ぎてから『藁科』(昭二六)などを発表した。常に  
文壇の外にあって己の人格を磨いたところから生まれた、これらの  
作品は俗謡(小唄)調・漢詩風などの形を借りつつ静かな緊張と寛  
やかな孤高の姿を表現している」と解説した。以上のように、戦争  
詩は中勘助による詩業の中でも一般に評価の対象となつてこなかっ  
た。

しかし、文学者の戦争責任を確認する経過において、近年、中勘  
助は「戦時下は早くから戦争詩人として活躍」(坪井秀人『声の祝  
祭』平成九年八月、名古屋大学出版)とその戦争詩が評価の俎上  
のほるようになった。

本論では、中勘助の戦争詩の位置づけについて、静岡市所蔵中勘  
助関係資料及び新出資料から考察したい。

## (二) 先行研究一覽

①山室静「第八章 昭和詩の展望」『昭和文学史 下巻』(昭和三  
一年一二月、角川書店)では「このような(論者注 高村光太郎、  
尾崎喜八等ヒューマニズムの詩人が戦時下に愛国詩人となつたよう  
な)戦争への同調は(中略)従来は『銀の匙』や『静かな流れ』の  
つましやかな世界を見つめる小説家として知られ、この期に突如  
として『琅玕』『機の音』『海に浮かばん』等の詩人として出現した中  
勘助にさえ見られたところ」と、中勘助を愛国詩人として位置付けた。

②村田正夫「戦争・詩・批評 村田正夫詩論集」(昭和四六年八月、  
現代書館)では「戦後責任としての戦争の詩」の系譜に中勘助の戦  
争詩が記された。『大戦の詩』収録「白水村」の詩文「白水村の戦  
ひに 敵前に独座して燃えあがる戦車 車外に右手を傷ついて殞れ  
た兵士 左手で書いた遺言 『天皇陛下万歳 豊田隆 隆は今から  
死にます お母さん御機嫌』を挙げ「兵士の死の美化作業にすぎ  
ない」と厳しく評価した。同様に「飯塚部隊長」に関し、「中国大  
陸に侵略の足を延ばした血と汗の死の行為の中に作者なりの人間の  
美しさ、天皇に奉仕する無知の人々の、無知なるがゆえの美しさを  
追求したのである」と中勘助の戦争詩の特徴を挙げた。

③阿部猛「『銀の匙』と『戦車兵』——中勘助」『近代詩の敗北』(昭  
和五五年二月、産学社)は、村田の論に共感する立場で、「百城を  
落す」「戦車兵」<sup>①</sup>を「反戦詩」とまでは言えないものの「厭戦詩」  
と位置付け、『大戦の詩』「通信兵」<sup>②</sup>の「その随筆・小説とはまった  
く異なり、詩情もなにもない」「幼稚さ」<sup>③</sup>が、「侵略」の意識の欠落  
に結びついたことを問題視した。

④高崎隆治『戦争詩歌事典』(昭和六二年九月、日本図書セン

ター)の中で二冊の意戦争詩集は次のように解説された。「大戦の詩」は「作者は新聞の記事を読み、それをそのまま詩らしきものに仕立てていったようで(中略)日清・日露戦争時代の『勇壯』を唯一の価値としたつまらない漢詩と同じもの」と厳しい評価が附されている。「百城を落す」でも「作風は『大戦の詩』とまったく同じで、新聞ニュースや戦線美談・銃後美談を、詩の形式を借りて表現しただけである。(中略)作者の感覚や発想は依然として日清・日露戦争時代のそれであって、近代戦がこの作者の手にかかる、たちまち古色蒼然としてくる」「独善」と評価は低い。

⑤矢野貫一「大戦の詩」「百城を落す」『近代戦争文学事典』第三集(平成八年六月、和泉書院)において、いづれも満州事変を扱ったと言及し、「戦死が戦場の花であるかの慨がある」「報道などから知り得た戦場の現象を、正直そのままに、あるいは無反省に詩形に写し取った」戦争を支持し、「広東へ 広東へ やれ やれー」(『広東へ 広東へ』)と声援を送るところは野次馬、「『百発百中 ダーン ダーン ふつとぶ敵兵 砕ける塁壁 敵弾も百発百中 人間の蜂の巣 倒れる照準手 天皇陛下万歳』(清河鎮)、敵も味方もみんな死ねとばかり、勘助は偏執狂じみてる」と手厳しい見方を示した。

⑥金津赫生「中勘助―二つの戦争詩集」『日本醫事新報』四〇二一号(平成一三年五月一九日)では「大戦の詩」に関して「当局が『論者注 支那』事変』で通そうとしたのに対して『大戦』と言いきったところ」に「日本国と国軍の危機」を感じ「敢然として戦争詩を作り始めた」心意気を認め、詩篇は「戦局の推移に合わせるように配列され(中略)勇壯な詩句がちりばめられている」「詩作が報道に取材した」とその特徴を記した。「百城を落す」に関して、「南

京」「白塩」「りす」等の詩に「反戦的とは言わないまでも、戦況に批判的になっていった」という中勘助の心情を重ねた論考。「時代の奔流に巻き込まれてしまった」理由として、二・二六事件を挙げ、「大陸に散っていった兵達に手向けられた挽歌」として「勘助文学が残した二精華とみなしうる」と高く評価している。また「光華門」が公声曲として作曲され、その音盤が文部大臣賞特賞に選ばれたとの情報も記された。

⑦佐藤卓己「悔恨共同体の文化」『物語 岩波書店百年史2』(平成二五年一〇月、岩波書店)では、戦後GHQ没収図書に「中勘助『大戦の詩』一九三八年」が「不問に付されたのか不明である」と扱いに疑問を呈する。

### (三) 先行研究から導き出された諸点

中勘助の戦争詩について、⑥の金津以外の論考は中勘助の戦争責任の証左として扱い、その評価は概ね低い。しかし、中勘助自身は、戦争詩の何篇かを自ら編集した角川書店版『中勘助全集』第一二巻にも収録し、隠ぺいする姿勢を示さなかった。中勘助自身による戦争詩の評価を含め、本論では中勘助の戦争詩を正当に評価するため、創作方法の解明と歴史的位置づけを、静岡市所蔵中勘助関係資料を手掛かりに確認する。

## 二. 中勘助の作品に対する太平洋戦争中の評価

### (一) 「銀の匙」の評価

太平洋戦時下で「銀の匙」ほど、兵士から民間人までよく読まれ

た作品はないだろう。「総力戦下の読書文化」（前掲「物語 岩波書店百年史2」）に、「軍部は岩波書店を嫌っている。しかし大陸の戦線へいつている若者たちの背囊の中には岩波文庫が入っている。そのうえ恤兵品として岩波文庫を要求する声が強かった。陸軍恤兵部ではやむを得ず何百万（何十万の誤記）冊という注文を発した。もっとも利益を度外視して納入せよという命令はつけ加わっておった」（小林勇『創業者を偲びつつ』一九五八年）と昭和一五年当時の状況が説明された。実際に昭和一五年一〇月二〇年に岩波文庫二〇点、各五〇〇〇部の陸軍恤兵部からの発注が社史に記されており、それら陸軍の岩波文庫セレクションの中に、中勘助の「銀の匙」が含まれていた。

図1に示した大政翼賛会文化部編『朗読文学選 現代篇』（昭和一八年五月、大政翼賛会宣伝部）にも、中勘助の「銀の匙」後篇八の「蚕」を飼う場面が収録された。同書巻頭の「はしがき」には「文学部で朗読文学を提唱し、日本文学報国会及び放送局の方々と数回の検討を経たのち、先づ過去の文学の中から特に朗読に適する作品を放送局を通して一般に懸賞募集した結果、選ばれた」作品を放送局で放送したとある。「隣組の常会」でこれらの作品の朗読を薦めており「常会が高尚な娯楽と教養の場所となる」ことを大政翼賛会が望んでいたことが示された。

「銀の匙」の巻末には、推薦者名「滑川清」と以下のような解説が付されている。

この作者は、岩清水のやうに済んだ一人の文学的境地を長らく守り続けてゐる。素朴で純粹な觀照の世界である。ここには蚕

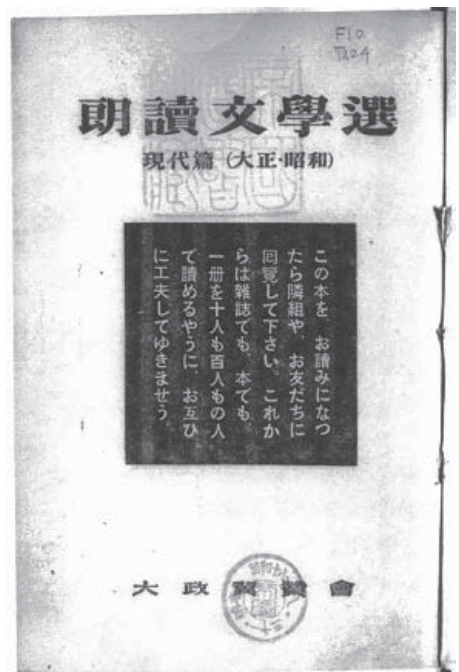


図1 『朗読文学選』（大政翼賛会文化部編、昭和18年5月、大政翼賛会宣伝部）

をかふ少年の日が、なつかしい回想をもつて描かれてゐるのであるが、絹をはく小さな動物に寄する愛情は童話的な美しさと共に、的確な觀察をもつてその成長を見事に描いてゐる。滑らかにもほほえましい一篇である。

中勘助の「銀の匙」は戦時下において人々に愛読された作品であったことが「検印」（『葦科』収録）という詩篇からも分かる。「思ひがけずでた「銀の匙」の十二版 嘘やまことの古い記憶 どうぞこの一万五千の検印が つぎつぎ極楽の蓮華とさくやうにと またもやさすらひの田舎住ひ しんみり机にむかつて こつこつとはんこをおす」との詩文にあるように、脱稿年月日、昭和一八年一〇月二二日当時、一万五千部の「銀の匙」一二版の増刷は紙不足からも異例であるが、軍部の要請、大政翼賛会のプロパガンダのもと、「銀の匙」を求める声が高かったことは明らかである。

## (二)「光華門」評価

また、先述の一(二)⑥の先行論文で示された「光華門」音盤の昭和十九年文部大臣賞特賞受賞について未確認であるが、話題作であったことが図2の資料(『音楽文化』二巻三号、昭和十九年三月、裏表紙)や「光華門」のテノール独唱部分を担当した声楽家伊藤武雄による「光華門」に寄せて(『音楽文化』二巻四号、昭和十九年四月)の次の言説からも分かる。

橋本君(論者注 「光華門」作曲家橋本國彦のこと)が一寸と呼ぶので行つて見ると、「放送局から頼まれて、君に歌って貰ふものを書いてゐる。洋楽浪曲と云つた風のものだ」と云つて書きかけの譜を見せて呉れた。見ると、中勘助氏のもので、「炸裂炸裂」とか「必ず目的を達して呉れ、頼むぞ」などといふ詩文散文とりませの、橋本君ならではの代物である。「せりふのところも大分出来る筈だがどうだらうか」と云ふので、「それは大いに結構でせう」と云つて初めの突撃のところ、途中の一番さはりに当る辺などの、音域の低すぎるところを上げて貰ふやうに頼んだことを覚えてゐる。

(中略)

これが演奏されたのは、ラジオで海外放送を入れて、僅か三回だけであつたと記憶する。レコードは、その最後の時、十五年の十二月十日の放送を録音したものである。これに対する反応は小さかつた。しかし私にとつては、かうしたものこそ我ならではとの聴かせどころがありさうに思へて第二の光華門出でよと希ふ心持である。

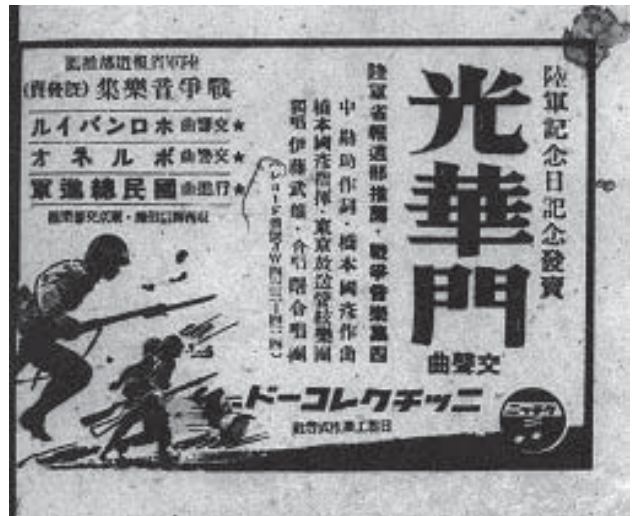


図2 「光華門」レコード宣伝(『音楽文化』昭和19年3月裏表紙)

伊藤武雄は、「光華門」に一番乗りし壮烈な討死をした伊藤少佐についても触れ、出征時に南京を訪れた際、伊藤少佐の墓前に詣でたことに言及した。演奏三回、レコードへの反応は小さいとあるが、レコード化に際し、中勘助の「光華門」を読んだ放送局が作曲を橋本國彦に依頼し、更に橋本から依頼された伊藤武雄もその詩文を受けとめ独唱した経緯が分かる。

中勘助は昭和十九年一月七日付小宮豊隆宛書簡で「先刻日蓄の社員の人がきて、僕の光華門をレコードにして売出したいから承諾してほしいといった。報酬は百円―薄謝と包み紙に書いてあつたが―、一方作曲した橋本氏―音楽学校の作曲の先生―は印税で一枚に

対し七銭、(中略)印税でなければ承知しないつもりだが、印税としたらいくらが相当だらうか。」と相談し、同年一月九日付小宮豊隆宛て書簡では「昨朝例の日蓄の人がきて一枚に付印税三銭といふ条件にできた。」と記した。もともと、軍部や放送局に依頼されて「光華門」を創作したのではないことが分かる。

前出の通り、『大戦の詩』から「渡洋爆撃」「山西」「光華門」の三篇を中勘助は『飛鳥』(昭和一七年版)に再録している。静岡市所蔵中勘助関係資料第三期、中勘助遺族寄贈資料の中に、『大戦の詩』(昭和一三年一二月、岩波書店)が存在する。書き込みは五箇所認められた。一頁の「渡洋爆撃」の上、一六頁「山西」の上、三頁「光華門」の上に黒丸が付いている。更に、四二頁「白骨」二行目「白雲をついて南京を襲ふ」の上に?マークが、五四頁「荒鷲」二行目「敵の荒肝ひしがんと」の「荒肝」のところ?マークが付いている。

『飛鳥』収録詩を検討する際の中勘助による書入れと考えられる。

### (三) 戦争詩歌全容並びにその背景

一 (一) で言及したように、坪井は『声の祝祭』(平成九年八月、名古屋大学出版)の中で、「戦争詩の主題的なパターン」として、「①〈戦意の高揚(民族意識の鼓舞など)〉、②〈戦捷の祝賀〉、③〈敵への侮蔑〉、④〈英霊への讃歌(出征兵士への送別)〉」に大別されると記した。別表1「中勘助による戦争詩歌一覧」各詩には坪井説による内容分類を付した。

別表1より中勘助の戦争詩歌がほとんど昭和一二年〜同一四年に亘り創作されていることが明らかとなった。創作方法の解明に関

し、静岡市所蔵中勘助関係資料第三期、中勘助遺族寄贈資料の中勘助の兄・中金一遺品トランク内にあったに戦況地図について触れたい。

そこには四〇点を超える新聞から切り抜いた戦況地図がある。それぞれ赤鉛筆で侵攻の経路が記されているが、特筆すべきは、図3 文芸春秋第二臨時増刊附録「支那事変要図」(昭和一二年九月)と図4「ラジオニュース聴取用 中部支那明細図」(日本放送出版協会)の二つの地図である。

図3及び図4の地図から、赤鉛筆で日本軍の進軍経路が書き入れられていることが分かる。これらの地図を誰がどのように用いたのか、昭和一七年四月三日に亡くなった兄嫁末子を追悼する意図の書き下ろし随筆『蜜蜂』(昭和一八年五月、筑摩書房)にヒントを見つけることができる。

「蜜蜂」には、時折「五月七日 三十五日(論者注 兄嫁が亡くなって三十五日)。(中略)コレヒドール(論者注 コレヒドール島)が落ちましたよ。泣く?今発表。五月五日に落ちたのです」というような亡き兄嫁への戦況報告があり、「毎朝茶の間の炬燵で私が見るために新聞の朗読をしてるのを姉は炬燵にはひつたり、長火鉢にあたり、時には障子の外で鏡台に向ひながらきいてゐて、将兵の苦勞や武勇譚のくだりになるとちぎにべそをかいた。さういふ私もこみあげる涙のため朗読が切れぎれになるのだつたが、姉はよく『また泣きたくなつた!』といつて泣きだした」と、新聞の戦況報道記事に兄嫁が涙する様子が回想的に描かれた。

また昭和一七年「五月八日」、「六月六日」、「六月十一日」、「八月十日」、「八月十五日」、「八月二十八日」、「九月二十四日」、「十月二

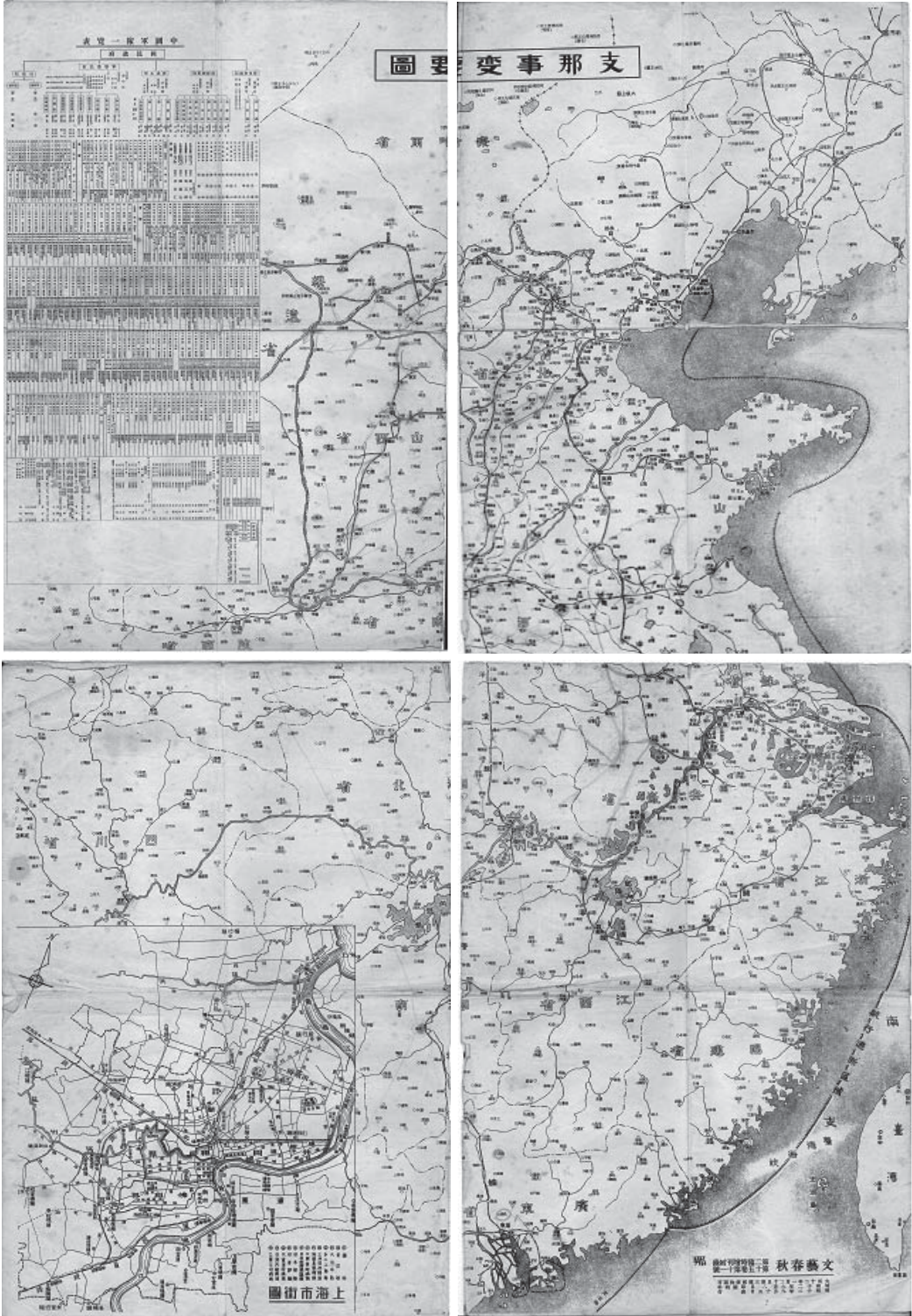


図3 4分割部分を組み合わせた地図（「支那事变要図」）

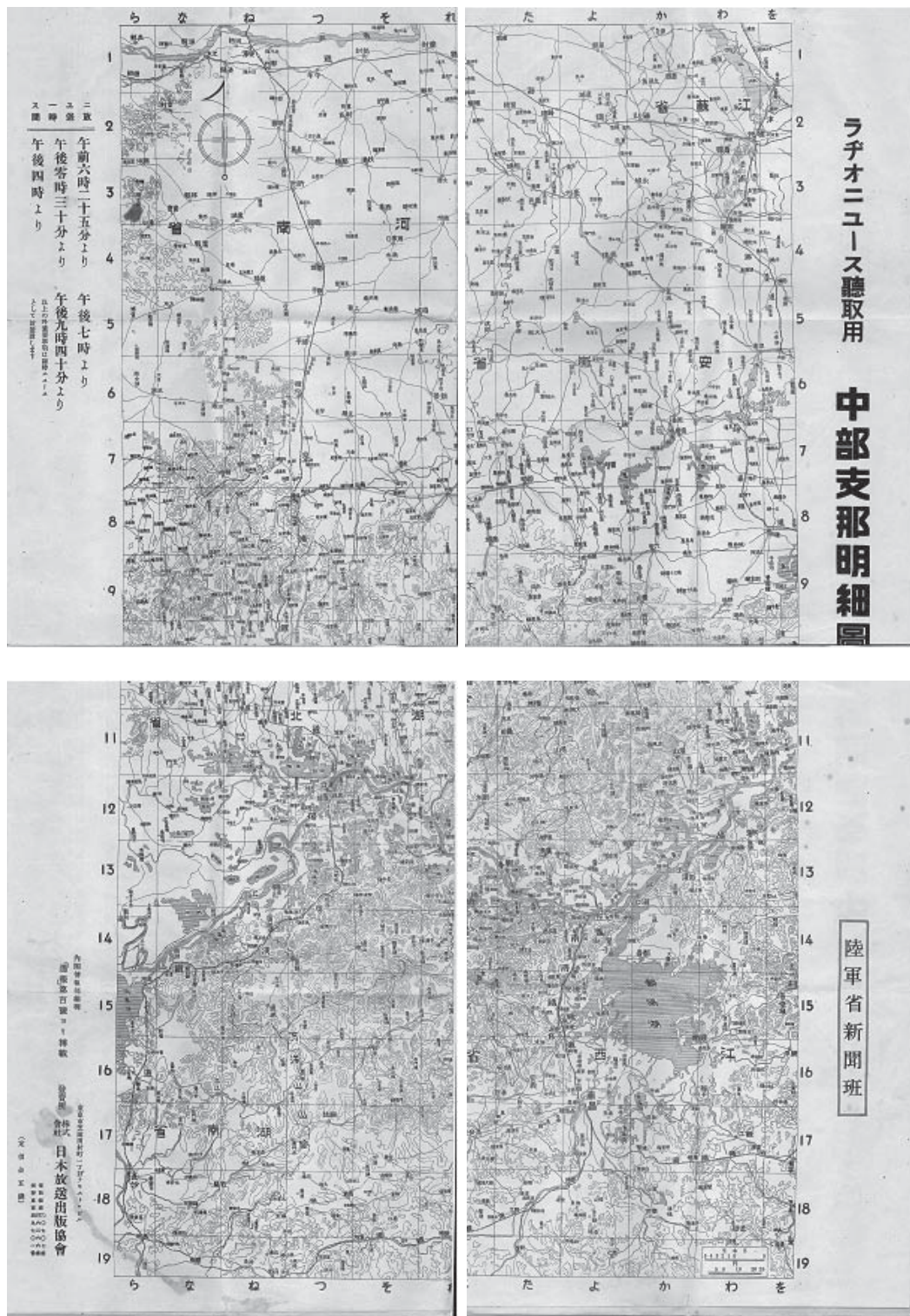


図4 4分割部分を組み合わせた地図 (「ラジオニュース聴取用 中部支那明細図」)



十八日」に、大本営発表の戦況を記している。これらの記事は、戦後「蜜蜂」再版の際に削除されている。

これらの記述から、中勘助が読む上げる新聞の戦況報道記事を涙ぐみながら兄嫁が聞いていた事が分かる。新聞の戦況報道記事は中家をまとめるコミュニケーションツールだったともいえよう。二枚の地図は兄嫁の遺品と考えられる。

新聞報道とこれらの地図を参照しながら、中勘助は『勇壮』を唯一の価値とした「詩や「兵士の死の美化作業にすぎない」と評価される詩を兄嫁のために書いたと考えることができる。別表1の通り、昭和一四年春の兄嫁の眼底出血以降、中勘助が戦争詩歌をほとんど創作しなかった理由として、中勘助が家族のために新聞掲載の戦況報道記事を読み上げる習慣を失ったためだと推測される。

### 三. 中勘助によって削除された戦争詩歌

「銀の匙」において、日清戦争時下の子どもや教師の単純な軍国主義への傾倒を「日本人に大和魂があればシナ人にはシナ魂があるでせう。日本に加藤清正や北条時宗がいればシナにだつて関羽や張飛があるぢやありませんか」と批判的に描いた作家として、中勘助は自身の戦争詩歌をどのように評価したのだろうか。

『飛鳥』戦後再販の際、削除された四篇と、再録された一篇「りす」を次に挙げる。

#### 渡洋爆撃

孟秋八月月明の夜  
飛艦海をわたつて大陸を襲ふ  
江南江北百千の城  
随所に粉碎して曉旦におよぶ  
呉楚閩越眼下に過ぐ  
四千年一夢のごとし  
青天を負ひ扶揺に羽うち  
鵬翼をつらねて日本に帰る

#### 山西

あしたに一壘を屠り  
ゆふべに一城を抜く  
急戦残兵まれに  
嶮壁糧道絶ゆ  
家郷三千里  
生死一瞬のまへ  
肅肅として峡谷をわたれば  
弦月長城に落つ

#### 光華門

昭和十二年十二月

昭和二三、二、一五

昭和二三、九、二二

十日午後五時二十分

南京光華門のさきがけに

山際葛野の決死隊

すは城頭の日の旗

「おれも行くぞ皆つづけ」

伊藤少佐はまつしぐら

城門に突き入れば

杉山少尉村田軍曹

その他の部下もあとにつく

待ちかまへたる敵兵は

それとばかり一斉に

手榴弾の雨をふらせば

心はやたけにはやれども

部隊は堰かれて進み得ず

城壁の外には

炸裂の嵐と人波と

押しつ押しされつ寄せかへす

城壁の上には

夕闇に踊り狂ふ死神

手榴弾

手榴弾

つぎつぎに倒れる兵

けし飛ぶ兵

「しつかりしろ おれもあとからいくぞ」

手近のひとりをだき起して

煙のなかに呼はる声

炸裂

炸裂

炸裂

阿鼻叫喚

地獄の点呼

「葛野中尉はゐるか

山際少尉はゐるか

杉山少尉はゐるか

村田軍曹はゐるか

皆ゐるな

それでよろしい」

炸裂

炸裂

炸裂

弾丸欠乏

苦戦悪闘

部隊へ伝令

田端一等兵

「必ず目的を達してくれ 頼むぞ」

声をかぎりに叫ぶ

月あかりの走り書き

血染めの紙片

……部下とともに死を覚悟してゐる

全員光華門を死守せよ……

総身あけに染みたる少佐の

頭部にまたもや手榴弾

どうと後へに倒れつつ

死守 死守 の声も絶えだえに

死闘六十時間

光華門の露とちりぬ

伝令は見事に使命をはたし

部隊長より祝ひの神酒を携へて

ふたたび城門に駆けいる刹那

おなじさだめの手榴弾に斃れぬ

戦ひ過ぎし十五日

風腥き新戦場

少佐の遺骨のまへに

供へられし神酒

血まみれの水筒

泣かぬものはなかりけり

ほめたたへよ人びと

語りつたへよ人びと

胸にきざめ人びと

涙をおくれ人びと

あつばれ南京城の一番のり

伊藤善光少佐

## 南京

古城夜深し

星斗しづかにめぐる

罌壁八十里

十万の貔貅守る

勦降明日を期し

巨砲口をならべて待つ

遮莫蔣將軍

骰子を投ずるや否や

天悠悠地悠悠

大江東西に流る

永劫流転の道

興亡一刹那

りす

大別山はてなし

百里鬼火をつらぬ

広済まぢかの激戦に

痛手をおうたひとりの兵

砂原にうち倒れて

きえゆく魂のみる幻

「お母さん 栗鼠があるよ お母さん」

昭和二三、三、二七

昭和二二、一二、某日

ほんにこのへんの木には  
たくさん栗鼠がある

「山口お母さんの手紙だよ」

戦友は血まみれのかくしをさぐつて

瀕死の友に読んでやる

「……いま畑には茄子がいつぱい出来てゐますよ

茄子はちぎつて町へ出させよう……」

お前様が帰る日は

この茄子にまた花のつくころか

実のなるころか……」

「お母さん 栗鼠があるよ」

さういつて息が絶えた

大別山無情

峨峨として烈日に灼く

昭和一四、三、二八

坪井説にもとづく「戦争詩の主題的パターン」としては、「渡洋爆撃」は〈②戦捷の祝賀〉、「光華門」「りす」は〈④英霊への讃歌〉、「南京」は〈①戦意高揚〉であり、「山西」は分類不可能な〈⑤その他〉とされる。「渡洋爆撃」「山西」「南京」は先述した市毛による「漢詩風」であり、高崎による「日清・日露戦争時代の『勇壯』を唯一の価値としたつまらない漢詩と同じもの」という評価はあながち外れていない。「りす」の場合、「大別山」の遠景と対比的な命消えゆく兵士の前景クローズアップという視覚的対比、「大別山無情」と

いう大自然の営みと「茄子」「栗鼠」という何気ない動植物の話題の軽重対比のなかで、情感が生み出されている。

以上より、中勘助が戦後、「りす」を除く四篇を『飛鳥』から削除した理由は、自然と理解できる。

#### 四、「鳥の物語」の設定の変化

中勘助の『鳥の物語』の第一作「雁の話」（初出『思想』昭和八年六月）は、昭和七年四月脱稿と記された神奈川県平塚在住期（大正一四年一月～昭和七年九月）に創作された作品の一つである。

様々な種類の鳥が自分の種族に伝承されてきた話を語るといふ物語の形式を持つ『鳥の物語』において、一作目「雁の話」と二作目「鳩の話」（昭和一六年一〇月、岩波書店刊『鳩の話』書き下ろし）では鳥が語る相手が異なっている。「鳩の話」まえがきで中勘助は「雁の話をかいたときには鳥たちは風流な足利義満將軍の御前にかしこまるつもりになつていた、それが十年後の今日この鳩は寛仁大度なスパイ汗マユのまえで話すことになつた。」と説明したが、この連作「鳥の物語」における、初期設定と二作目以降の設定との相違を疑問視した先行研究はない。また「鳩の話」は『鳥の物語』（昭和二四年五月、山根書店）再録時には「スパイ汗マユ」から「オゴタイ汗」に語る相手が変化している。

足利義満は室町幕府第三代將軍であり武家であっても「風流な」と中勘助によつて形容されたように鹿苑寺（金閣寺）建立をはじめ北山文化を築き南北朝を合一させる人心安定した一時代を築いた。一方オゴタイは父チングス汗とモンゴル統一、金遠征、大西征を

行った武人であり、自らの皇帝時代においても帝国領土をヨーロッパへ拡大させ続けた。スパタイはチングス汗からその孫のバトゥマで三代に亘って仕えた名將軍であった。文化人足利義満から武人・スパタイとオゴタイへの変化の理由は、戦局の激化と見るのが相応しいだろう。

「鳩の話」は預言者ヨハネの死とナザレのイエスの十字架磔刑による最期が主題である。武人の前で聖人の信念にもとづく死を平和の象徴である鳩が語るという点に、武人に対する批判的な視点が存在する。

また、終戦直前の昭和二〇年八月九日脱稿の「鶴の話」(初出『新潮』昭和二十一年一〇月号)は、神亀元年一〇月五日、聖武天皇の和歌の浦行幸の折に山部赤人が詠んだ一首「和歌の浦に潮みちくれば濁をなみ あしべをさしてたづ鳴きわたる」(『万葉集』巻六 九一九歌)にちなんだ話である。話の結末は、初出と角川書店版『中勘助全集』第三卷(昭和三六年二月)再録時では次のように異なる。

「やよ鶴よ、汝らはそれなる赤人にたくひ稀なる歌をよませたによつて褒美をとらせるぞ。何なりと望め」(中略)

みかどはきこしめされ

「おおさやうか、さらば褒美のしるしに汝らの頭を日の出の色に染めてやらうぞ。近うよれ」とまぢかい岡に今を盛りと咲きいでたさつきの花をつませて御手づから鶴の頭を真紅の色にお染めになりました。

これがめでたい丹頂のいはれでございます。

『新潮』昭和二十一年一〇月号

そのときみかどはやをら手をのべさせられて一羽一羽彼らの頭をなでられましたところ、さすが日のみこ手にふれて彼らの白い頭が見るみる日の出の色に染まりました。これがめでたい丹頂のいはれでございます。(角川書店版『中勘助全集』第三卷)

いずれも *Japonensis* を学術名に持ち日本を代表する鳥・丹頂鶴の由来に関する結末である。「日のみこ」である古代の聖王による手技(初出時はさつきの花で頭を日の出の色に染色、全集収録時には手を触れることにより頭を日の出の色に染色)にあったという筋である。これは、「鶴の話」作中「みかどは大層信心ぶかいおかたで国ぐにに残らず寺をお建てになるとかなつたとかいふぢやないか」と鳥たちに噂される日本の古代の聖王を尊ぶ表現と考えられる。

中勘助は北原白秋らが編んだ『新万葉集』巻六(昭和一三年六月、改造社)に東葛時代・平塚時代の短歌一四首が収録された新万葉歌人であった。作中、万葉歌人山部赤人に気持ちを重ねていたと考えられる中勘助が、「歌の名人」とみかどに褒められた山部赤人に「赤人はただありのままを言葉につづりましたまでのことでなんの手柄もございません。おそれながらあの鶴こそお褒めあづかるべきでございます」と言わしめたことは意味深い。この言葉に関し、小宮豊隆も「解説」『鳥の物語』(昭和二四年五月、山根書店)において「中の赤人観から来ている言葉であり、且つ中の芸術観の一部を代表させた言葉」と指摘する。「新聞ニュースや戦線美談・銃後美談を、詩の形式を借りて表現しただけ」という高崎による中勘助の戦争詩評価にあるように、新聞記事等で知る現実感がない戦争を素材とすることよりも、目の前の優れた素材の「ありのままを言葉につづ」

ることへの創作方法の転換が意識下にあったと考えられる。

## 五、まとめ

中勘助は「提婆達多」創作直後の大正一〇年頃に印度学仏教学資料を通して知った古代印度の聖王阿育王に創作意欲を刺激され、いつかその話を書きたいと希望していたことは拙論<sup>4</sup>で述べた通りである。中勘助夫人も角川書店版『中勘助全集』第一三巻「あとがき」において「前々から考えてゐた『阿育王』『紅鶴の話』などの創作にとりかかるのを、本人も周囲も楽しみにしてゐた」と語るように「阿育王」は中勘助のライフワークであった。

時代の奔流の中で、家族とのコミュニケーションの一環として、新聞朗読を通して得た新聞における戦況報道記事をもとに戦争詩歌を創作した。その私的な詩歌創作が岩波書店における『大戦の詩』『百城を落す』公刊という公的な文学業績に繋がった点において、中勘助における戦争詩歌創作発表は公私混同の感が否めない。また『飛鳥』戦後再販の際に中勘助により削除された四篇の詩は、高崎説・坪井説の通り一種の「戦争屑詩」であり、静岡疎開により目の前の優れた素材の「ありのままを言葉につづ」という芸術観を取り戻した時期からすれば恥ずべき作品であった。幸か不幸か兄嫁の健康状態の悪化により戦争詩の創作が日中戦争時下に中断されたこと、静岡疎開により自然美に触れたこと、常に聖王たるものほという「阿育王」を構想する小説家の視点を持っていたこと、目の前の優れた素材の「ありのままを言葉につづ」ることの大切さを意識したことが、その後の業績に繋がったと考えられる。

昭和一七年七月五日付志賀直哉宛書簡で中勘助は「あなたは日本文学報国会といふのにおはひりになりましたでせうか。詩、随筆、小説と各部門から手紙がきましたがはひるとどうなるのかはひらないうとどうなるのか充分はつきりしないので躊躇してをるところです。」と尋ね、同年七月七日付け同氏宛て書簡では「早速お返事を有り難うございます。それでは私も入会を見合わせませう。」と日本文学報国会に入会しない旨をしたためている。しかし実際には、『日本文学報国会会員名簿』昭和一八年版に小説部会名誉会員の志賀はもとより中勘助も小説部会、評論・随筆部会、詩部会の会員として名を連ねている。世界大戦という奔流は、志賀直哉や中勘助が考える程、甘くなかったという証左であろうか。

戦時下でも読まれ続けた「銀の匙」の作家としての中勘助の位置づけと自身の作家としての矜持が、戦争詩作者としての中勘助を覆い隠していたと考えられる。

本論中に別途出典の記載がない場合、本文は岩波書店版『中勘助全集』による。詩歌の創作年月日は初出による。

### 註

(一) 戦車兵

南京へ 南京へ 轟轟と突進する戦車の列 周囲の丘陵からうち出す巨砲  
弾丸にうちぬかれて燃えあがる戦車 戦車から飛び出して万歳を叫びながら  
両手をあげて生きながら燃える兵隊 敵都をまへに生きながら灰にな  
つてゆく

昭和一四、三、二九

(二) 通信兵

電話架設の通信兵五人

部隊をはなれて前線へ

とたんに出あつた敵五十

小勢と侮り攻めかかる

畜生 邪魔されてたまるか

銃がないので短剣で突き殺す

グサリ グサリ

十五人やつつけて二人死んだ

すこいぞ 通信兵

昭和一三、一〇、一三

(3) 日中戦時下において「戦争詩といふもの」(「蠟人形」昭和一三年三月)

の中で安藤一郎は、戦争詩を「①愛国的なりリズムに依つて大衆を鼓舞するもの、②直面した悲劇と惨禍を『冷静且つ刻銘』に写実するもの、

③思想の観点に立つて皮肉や風刺に近づくもの」とその役割を三分類している。

(4) 「犬」における人物造型考(一)(平成二五年五月、『会誌』日本女子  
大学大学院の会)

\*静岡市所蔵中勘助関係資料閲覧に当り静岡市文化振興課にお世話になりましたことを御礼申し上げます。

\*別表1収録以外にも「人なき村」「提燈行列」「無言の凱旋」「隠密渡河」「土饅頭」「血染めの砲車」「あの岸」「古布の庄」(いずれも初出未確認)の戦争詩が存在する。

別表1 中勘助による戦争詩歌一覧

No.	詩の題名	創作年月日(昭和)年・月・日	収録詩集名	主題分類
1	日の丸	一一・六・五	「吾往かん」	①戦意高揚
2	渡洋爆撃	一一・二・一五	「大戦の詩」	②戦捷の祝賀
3	大行山	一三・一〇・四	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
4	行軍	一三・一〇・一〇	「大戦の詩」	⑤その他
5	襲へ 襲へ	一三・七・七	「大戦の詩」	②戦捷の祝賀
6	緩遠	一三・一〇・三	「大戦の詩」	②戦捷の祝賀
7	大陸封鎖	一一・九・一一	「大戦の詩」	⑤その他
8	山西	一一・九・二二	「大戦の詩」	⑤その他
9	白水村	一三・一〇・五	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
10	鷲馬	一三・九・二二	「大戦の詩」	⑤その他
11	トーチカ	一三・五・二八	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
12	敵前架橋	一一・一一・三	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
13	ボンボン船	一三・九・二二	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
14	蜜柑	一三・八・四	「大戦の詩」	①戦意高揚
15	光華門	一三・三・二七	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
16	茶毘	一三・三・一	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
17	白骨	一三・八・一一	「大戦の詩」	①戦意高揚
18	南京	一三・七・一七	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
19	銭塘江	一三・八・三	「大戦の詩」	⑤その他
20	地獄風呂	一三・三・二三	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
21	黄河だぞ	一三・六・二二	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
22	荒鷲	一三・五・二二	「大戦の詩」	②戦捷の祝賀
23	徐州	一三・六・一一	「大戦の詩」	②戦捷の祝賀
24	聖戦	一三・八・一一	「大戦の詩」	①戦意高揚
25	神輿	一三・六・二六	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
26	開封	一三・八・一三	「大戦の詩」	③敵への侮辱
27	リユシコフ	一三・八・一三	「大戦の詩」	③敵への侮辱
28	張鼓峰一	一三・八・一一	「大戦の詩」	③敵への侮辱
29	張鼓峰二	一三・一〇・一三	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
30	大宗庄	一三・九・二〇	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
31	飯塚部隊長	一三・一〇・一五	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
32	さつま芋	一三・一〇・一一	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
33	水牛	一三・一〇・一四	「大戦の詩」	①戦意高揚
34	竹槍隊	一三・一〇・一三	「大戦の詩」	④英霊への讃歌
35	通信兵	一一・一〇・二〇	「大戦の詩」	①戦意高揚
36	広東へ 広東へ	一一・一〇・二〇	「大戦の詩」	①戦意高揚
37	大戦 河北	記載なし	「大戦の詩」	①戦意高揚
38	大戦 江北	記載なし	「大戦の詩」	①戦意高揚
39	大戦 長江	記載なし	「大戦の詩」	①戦意高揚
40	大戦 江南	記載なし	「大戦の詩」	①戦意高揚
41	大戦 広東	記載なし	「大戦の詩」	①戦意高揚
42	大戦 漢口	記載なし	「大戦の詩」	①戦意高揚
43	漢口	記載なし	「大戦の詩」	②戦捷の祝賀
44	短歌一	一三・一〇・一五	「大戦の詩」	①戦意高揚
45	短歌二	記載なし	「大戦の詩」	①戦意高揚

No.	詩の題名	創作年月日(昭和)年・月・日	収録詩集名	主題分類
46	短歌三	記載なし	「大戦の詩」	①戦意高揚
47	短歌四	記載なし	「大戦の詩」	③敵への侮辱
48	短歌五	記載なし	「大戦の詩」	①戦意高揚
49	短歌六	記載なし	「大戦の詩」	①戦意高揚
50	短歌七	記載なし	「大戦の詩」	①戦意高揚
51	太湖	一一・二・二二	「百城を落す」	②戦捷の祝賀
52	南京	一一・二・某日	「百城を落す」	①戦意高揚
53	黄河	一一・二・二二	「百城を落す」	⑤その他
54	格闘	一三・四・三	「百城を落す」	⑤その他
55	江北	一三・八・三	「百城を落す」	⑤その他
56	提灯行列	一三・一〇・一五	「百城を落す」	②戦捷の祝賀
57	鉛筆	一三・一一・三	「百城を落す」	⑤その他
58	日本刀	一三・一二・一七	「百城を落す」	③敵への侮辱
59	軍馬	一四・二・二三	「百城を落す」	⑤その他
60	遺書	一四・二・二三	「百城を落す」	④英霊への讃歌
61	蘭州	一四・二・二三	「百城を落す」	④英霊への讃歌
62	武漢攻略	一四・二・二四	「百城を落す」	⑤その他
63	固陽	一四・二・二五	「百城を落す」	⑤その他
64	雁門関	一四・三・七	「百城を落す」	④英霊への讃歌
65	傳書鳩	一四・三・五	「百城を落す」	②戦捷の祝賀
66	鉄橋爆破	一四・三・一〇	「百城を落す」	③敵への侮辱
67	戦車ありがたう	一四・三・一〇	「百城を落す」	②戦捷の祝賀
68	清河鎮	一四・三・一一	「百城を落す」	④英霊への讃歌
69	盲目	一四・三・一一	「百城を落す」	④英霊への讃歌
70	不死身	一四・三・一九	「百城を落す」	⑤その他
71	鶴嘴	一四・三・二四	「百城を落す」	①戦意高揚
72	わらち	一四・三・二五	「百城を落す」	④英霊への讃歌
73	りす	一四・三・二八	「百城を落す」	⑤その他
74	戦車兵	一四・三・二九	「百城を落す」	④英霊への讃歌
75	夜襲	一四・三・二九	「百城を落す」	④英霊への讃歌
76	新南群島	一四・四・一九	「百城を落す」	①戦意高揚
77	遺族	一四・四・二七	「百城を落す」	④英霊への讃歌
78	湖北	一四・五・二二	「百城を落す」	②戦捷の祝賀
79	白塩	一四・六・一	「百城を落す」	⑤その他
80	荒鷲	一四・六・一	「百城を落す」	①戦意高揚
81	西住中尉	一七・某月某日	「百城を落す」	④英霊への讃歌
82	守袋	一七・一・一三	「百城を落す」	④英霊への讃歌
83	軍旗とともに	一八・三・三	「百城を落す」	④英霊への讃歌
84	アツツ島	二〇・三・四	「百城を落す」	④英霊への讃歌
85	原稿	二〇・五・四	「百城を落す」	⑤その他
86	原子爆弾	二〇・二・四	「百城を落す」	⑤その他